

——淡路圓治郎氏追悼記——

淡路圓治郎先生を偲んで

豊原恒男

わが国産業心理学の開拓者の権威の御一人でもあり、また愚生にとって公私ともに恩師であられた淡路先生が御逝去になられて、早くも一年を迎えようとしている。しかし、私にはなぜか先生の御昇天がピンとこない。今でも、病院に伺えば、例の勘高い御声で叱られそうな気がしている。しかし、フと産業心理学に行詰りを感じて、淡路先生の御意見を伺おうかななどと想った瞬間、先生はもう居られないのだという現実の寂寥感に陥ることも少なくない。

私が比較的長時間、先生とゆっくりお話しできたのは、もうだいぶ何年前のことで、先生にお世話になった私共何人かの連中で浦和の太田窪で鰻を食べながらのときであったが、そのとき、先生の言われたひとことが、その後、今に至るまで私の頭にコビリついて離れない。それは、先生が、「このごろ人間の幸福って何だろうと考えている」と言われたことである。少なくとも、私たちが先生から産業心理学の御指導を受けていたころは、このような疑問は、先生から出されなかった。このころの淡路先生は、第一回的心臓病がすっかりよくなられてはいたが、第一線を退かれ、先生の元来好きであった「義太夫」に専ら楽しみを求められつつ、奥様の御看病をなされていたころかと思われる。そこで私は、先生のこのことばをお聞きしたとき、先生は義太夫にとりつかれたのかなと思ったり、奥様の看病で気が弱くなられたのかな等、まことに失礼なことを考えていたのであったが、しばらくしてから、先生のこの御言葉は、産業心理学の行手に大きなヒントを示されたものであることを知り愕然としたことを覚えている。僅か十年くらいまえまでは、産業心理学をやりつつも、産業心理学なんて結局、経営に振りまわされているか、産業心理学者の趣味でいろんなことをやっているに過ぎないようなもので、これでいいのかといった生意気な気持ちが私の胸にあったが、先生の「人間の幸福とは何か」という問いかけを契機として、私の産業心理学も、「経営のための産業心理学から人間のための産業心理学へ」という方向転換にふん切りがついた次第である。しかしこの問題は深くて難しい。先生が御存命であったうちになぜもっと御意見を承らなかったのか悔やまれる。

もともと先生は一見、たいへん厳しくて、人情など解して下されないように見えながら、実は日常の心理の機微にはよく通じておられ、それをたいせつになされたかたであった。御元気なころは、毎月奥様同伴で義太夫に行かれ、そして目に涙されるあの先生のイメージは、先生の若き日に、闊志満々として一般心理学、理論心理学に挑戦され、応用心理学の自律性を学会で堂々と発表されたあの頑固ともいべきお姿から誰が想像できたであろうか。

先生は極めてプラクティカルな応用心理学者として、理論心理学、一般心理学を強く批判しておられたが、やはり先生も心理学者だなと思うようなことがしばしばあった。というのは、一つは、先生は若い日ごろ、ハンブルグ大学に留学されていたのであるが、そのころウィリアム・シュテルンに傾倒されたようで、先生に議論を吹きかけると、よくシュテルン先生というお言葉がでてきて、あの難解なペルソナリスティックの人間論を述べられ、自然科学主義でガチガチだった私の頭はまことに混乱そのものに陥ったのであるが、今日、多少なりともシュテルンの考想を理解できているのも、先生のお蔭だと感謝している。また私が卒業当時傾倒していたクルト・レヴィンを先生はお嫌いであって、「君、彼は才子にすぎないよ」といって暗に私に忠告されたことがあった。私も若気の至りで、彼の門下のあのこまかい字で長々と書いてあるフォルシュンクの研究を読んでいて、「どこが才子なのか」といった失礼なことを、当時先生のお宅で毎火曜日6時からやっていた輪読会で持ち出したこともあったが、驚くべきことは、先生はちゃんとそれを読んでおられて、「君、レヴィンはそんなこと言っていないよ」とさとされ、大恥をかけた覚えもある。先生はたしかに一般心理学に批判的ではあった。しかし、ある意味では当時の一般心理学者以上に理論を読了された上での批判であったことをその後になって知ったとき、応用心理学をやるということは、たいへんなことなのだなあということをしみじみと感じた次第である。

私の五十年を超える心理学徒としての生活の五分の四は、陰に陽に淡路先生と共にあり、想い出は数限りなく浮んでくる。散歩しようと言われてお伴すると、クサヤの乾物を買って頂いたり、駒形の「どぜう」を御馳走になったりしたような——先生は案外、いかものぐいでおられた——私事に及ぶことから、航研時代に研究報告の

原稿を提出すると、毎回、「君のは日本語じゃない。ドイツ語の翻訳文だよ」と言われて全頁が真赤になるまで文を直して下されたり、机の上を乱雑にしておくでゼロリとにらんでいかれたりした——先生の机の上はいつも几帳面に整理されていたのであるが——学者へのさまざまなしつけが厳しかったことなど、走馬燈のように私の脳裡をかすめていく。私は、こんなにいろいろとお世話をかけた不肖の弟子であり、最も従順でなかった弟子

であったのだが、先生は、面会謝絶の病室の札にもかかわらず、病院の廊下で私の声をきくと、「豊原君か、どうぞ」と招じいれて下された先生であった。

しかし、この偉大人情的応用心理学者淡路先生も今は亡い。私はいま先生のあとをトボトボと歩みつづける一介の産業心理学者に過ぎないという孤独感に包まれつつ、この拙文を先生に捧げる次第である。